

ISSN 0388-5569



山口大学附属図書館報

Yamaguchi University  
Library Bulletin

2001.SEP

Vol.22  
No.1

## 図書館と徒然なるままに

山口大学附属図書館長 中村和行

21世紀の幕が開き、生命科学分野ではセンセーショナルな報告があった。ヒトゲノムの粗方の解析がなされ、ヒトの細胞には約3万種類の遺伝子が発現され得ることが判明した。生物の進化を解明する上で極めて重要な成果である。ショウジョウバエに比較して約2倍の数の遺伝子が巧妙に調節されながら発現することでヒトの生命が維持されるのであるが、今後はこれらの遺伝子群の発現調節機序と遺伝子産物である蛋白質の機能解析とその調節機序の解析が生命科学の中心研究課題になるであろう。ゲノム単位で発現される全ての遺伝子産物をプロテオームと呼び、その系統的かつ網羅的な研究をプロテオミクスと呼ぶ。このゲノムとプロテオームの総合的な研究は、35億年にわたる生物進化の時間

の流れを分子の変化で説明しようとするのである。Homo sapiens sapiens (現世人類で「賢いヒト」を意味する)は、たかだか3万年前から地球上に存在していたと考えられているので生物学的な進化が進んでいるとは思えないが、最近の若者には顎が細く端正な顔が多くなったと思うのは小生だけであろうか。一方、ヒトは環境を自ら適応しやすいように変える知能を獲得したために、自然淘汰という外的要因による進化の速度を減じたように思うが、知能という内的要因による進化の速度を増すように思う。そのひとつに言語の進化がある。

先日、図書館の蔵書について教えていただくことがあった。小生が「古い文書(ふるいづん



しよ)」がありますかと尋ねると、「古文書（こもんじょ）」のことでかと訂正していただいた。その折から「文書」に興味をもつようになり、その由来を調べてみた。ただし、浅学非才の我が身にとっては『広辞苑』が唯一の頼りであった。「文書」は、もんじょ、もんぞ、ぶんじょ、ぶんしよと呼び、「聞書（もんじょ）」とも書く。「聞書」は除目（じもく）の宣旨（せんじ）を記載した文書であったとある。除目とは、官に除し目録に記すとある。因みに、諸司、諸国の主典以上の官を任ずる儀式は、公卿が集まって約3日間清涼殿の御座前で行い、摂政のときにはその直慮で行うを例とした。左大臣が一ノ上として執筆となり、一々任官する人を大間書に注記するのを法としたとある。秋の司召には主に京官を任じ、春の県召には主に国司などの地方官を任ずるとある。宣旨とは、天皇の命を伝える公文書とあるが、その本来の詔勅は発布に極めて複雑な手続きが要した。平安時代以後は内侍から蔵人に、蔵人が太政官の上卿に伝えて上卿は少納言または弁官として外記または大史に命じて文書にして発行したとある。従って、任官にあたっては1200年以上も体制が生き残っていることになる。これも文化と言うべきであろう。

さらに調べると、「文」は、もん、ぶん或いはあやと呼ぶ。もんは、「聞」あるいは「銭の単位」とある。「文章（もんじょう、ぶんしょう）」は、文字を連ねてまとめた思想を表現したもので普通には韻文に対して散文をいうとあるが、文は青と赤のあやで、章が赤と白のあやであり、物の面に表れたさまざまな色合や模様、特に斜めにうちがえた模様、筋道、条理などを示すとある。あやは武に対して学問、学芸、文学、芸術などの文化活動を示すとある。因みに、文章院（もんじょういん）とは、平安時代の大学別曹の一で、804年 延暦23年 に入唐した菅原清公が帰朝後奏請して建てたもので、その後東曹を大江家の学舎、西曹を菅原家の学舎として

その子弟を教育したとある。その大学で詩文と歴史を教授した教官を文章博士と呼んだ。

ところで、古い文書といえはすぐ思い浮かぶのは『古事記』である。『古事記』は（こじき）が一般であるが、本居宣長は（ふるごとぶみ）と呼んだとある。現存する日本最古の歴史書で三巻からなり、稗田阿礼が、天武天皇の勅命で踊習した帝記および先代の旧辞を太安万侶が元明天皇の勅により撰録したもので、712年（和銅5年）に献進したとある。上巻は、天地開闢から鵜葺草葺不合命（彦火火出見尊の子で、母は豊玉姫であり、神武天皇の父である）、中巻は、神武天皇から応仁天皇までを、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事を収め、神話や伝説と多数の歌謡を含み、日本の統一の由来を物語っている。興味深いのは、『古事記』に用いられている日本漢字音である。日本に伝わった漢字音には「古音」、「呉音」、「漢音」、「唐音」と「宋音」などがあるが、「古音」は呉音以前に日本に伝わった漢字音で「意」をオ、「巷」をソとする類である。「呉音」は古代中国の呉の地方（揚子江下流沿岸）から伝来した音とされ、日本では多くの僧侶が用いた。「行」をギャウ、「止」をトという類であり、平安時代には後に伝わった「漢音」を正音としたのに対して和音ともいった。「漢音」は長安地方で用いた標準的な発音をうつしたもので、遣唐使、留学生、音博士などによって、奈良・平安時代に輸入された。「行」をカウ、「日」をジツという類で、官府や学者は漢音を用いることが多かったが、仏家は呉音を用いることが多かったようである。「唐音」は宋・元・明・清の中国音を伝えたものの総称で、禅僧や商人などの往来に伴って、中国江南地方の発音が伝来した。「行灯」をアンドン、「普請」をフシンという類である。「宋音」は日本の入宋僧や帰化した宋僧の伝えた音で、実質上は唐末から元初のころまでの音で、鎌倉時代までに渡航の禅僧や商人から民間に流布した。「行」をアン、「杜」をツという類である。『古事記』には



「呉音」が含まれており、その編纂の時代考証に新たな可能性もあるとのことである。

「呉音」をはじめとする日本漢字音は現在も生きているのではあるが、漢字を正確に読むことのできる日本の大学生は、全体の何割であろうか。学府にあるものが、日本語の由来や歴史を知らないと、日本文化の衰退につながりそうである。「大化」の改新が「退化」にならないようにと「おち」を言っている場合ではない。言語は使われないと消滅する。かといって本来の言語があいまいとなると、文化の迷走が始まり、国際関係にも要らぬ摩擦を生じ、国の行く先が見えなくなると考えるのは杞憂であるかもしれない。国際化には英語教育が必須である。自然科学の分野で英文論文は論理的で理解しやすいと感じるのは文法の違いによるところが大きいのではないとも考える。端的には、英文は主語・述語・目的語の順であるために文意が明白で目的語も述語の後に開放的に続くことができる。一方、和文は主語・目的語・述語の順であるために目的語が主語と述語に挟まれ、しまいには述語のYes、Noが述べられるまでは文意が明白にならない。また、日本では「あの、その、この」を「よろしく」で文意が通じる（小生もよく使います）。主語も述語も要らない。これは、日本人の論理的な思考にまでも大きな影響を与えている。日本では、経験論的・社会論的な価値観（決して正しくないと言うのではない）から親や上司に「言い訳をするな、理屈を言うな」と言われて「すみません」と応じてきた風土がある。いっぽう、欧米では「すみません」には"excuse me"があり、「言い訳させて下さい」と論理的に弁明することを教育されているように思う。もし、日本がグローバルスタンダードで生きて行こうとするならば、まずは日本語で「理屈を言う」ことに価値を付与し、「知的財産」をより評価する価値観を身につける必要があると考える。そのためには、国語教育がきわめて重要である。現在の日本の教育システムでは、

国語教育は小学校・中学校・高等学校での教育に命運がかかっているが、大学においても日本語教育は重要なものとなるに違いない。今後も英語教育や日本語教育などの語学教育の環境整備に附属図書館がお手伝いできれば幸いである。

現在、山口大学附属図書館は、従来の機能に加えて電子図書館的機能を整えつつあるが、人と人のコミュニケーションを大切にしながら、学生のための快適な自主学習環境や研究能力の自主的な開発のための環境を整備しようと図書館員一同努力している。今後も図書館を「知的で快適な広場」として、学生はじめ教職員さらに一般市民の方々にもますますご活用いただくことを願っている次第である。図書館は、昨年からは自己点検・評価を行い、本年は外部評価も受ける予定である。今後も図書館の利用にあたってお気付きの点があれば、辛口でご指摘頂きたい。利用者（特に学生諸君）の指摘が、図書館の機能を充実させ、利用者の私益に繋がると信じる。

最後に、山口大学評議会のご推薦により本年4月1日付けで附属図書館長を拝命した小生に執筆の機会を頂いたことに感謝する。また、独立行政法人化や民営化など国立大学にとって開闢以来の大変革が行われようとしている時代に、『広辞苑』を片手に徒然なるままに書かせて頂いたもので紙面を汚す我が侏をお許し頂きたい。

（なかむら かずゆき）



## 魅力ある図書館（その3）

附属図書館運営委員会委員 太田 聡

### 集中管理の是非

前稿で述べたように、山口大学全体としての蔵書数は全国有数である。が、この蔵書は図書館で集中管理されている訳ではないので、いろいろと不便・不都合な面もある。例えば、検索の結果「研究室長期貸出」と出ると、（山口大学内に存在するのに）その図書の借用を諦める学生が多い。また、他大学・他学部から図書の借用依頼があった場合、図書館の情報サービス係の人達が教官に気を遣いながら借用を求めても、なかなか連絡が取れなくて、該当する図書を得るまでに何日もかかるということがよくある。

では、一気に図書の集中管理を進めればよいのかというと、事はそんなに簡単ではなく、様々な難しい問題が立ち上がる。まず、本館にはそれほどの収蔵スペースがないし、増築も容易には実現しそうにない。また、文系の人間にとっての本は、理系の人間にとっての実験道具・実験材料のようなものなので、それを集中管理の名の下に召し上げられてしまうことには猛反発が必至である。例えば、理系の人達も、それぞれの必要に応じた各実験室が必要であろうし、キャンパスの中央に総合実験室があればよいという訳にはいくまい。それと同様に、文系の人間にとっては、多くの図書資料が手近になければ研究に支障をきたしてしまう。沢山の図書を全部読める訳ではなくても、少ししかない中から数冊を読むのと、沢山の中から数冊を選んで読むのとでは違う。よって、長年に渡って揃えた資料は手元に置きたいと考えるのは自然なことである。第一、研究費で購入した図書の価値は、他の誰よりも、購入請求した本人が一番分かっているのだから、その人のところに置くことの方が、利用される可能性の少ない場所に置くよりも、有意義とも言えよう。しかしながら、研究費で購入した図書は、私物ではないので、より多くの人々が利用できる状態にしておく必要も

もちろんある。

さて、では集中管理と個別管理のメリットの両方を生かすような方法はないのであろうか。私の提案は、可能であれば、各学部図書館（今の講座ごとの書庫をもっと統合させたものを意図している）を作って、そこにそれぞれの学部の図書資料を集中させることである。経済学部の東亜経済研究所の書庫がよいモデルになるであろう。附属図書館本館は吉田地区にある5学部の共用だから、予算の使い方や充実させたい分野に関しての意見がまとまりにくいという難点がある。が、学部内の図書館（室）ならば、関係教官の価値観も近いし、運営も比較的スムーズに行くであろう。そして、各教官が研究費で購入した図書は、その教官の研究室に、例えば、5年間は優先的に置くが、その後は学部図書館に並べて共用図書とするといった具合にするのである。さらに、この各学部図書館に管理者（定員削減の折から、助手ポストは認められにくいだろうから、可能ならば、附属図書館職員の方に意向をお願いしたい）を置けば、例えば、学内外からの借用や複写依頼などに迅速に対応できるし、また、購入管理もお願いすることで、専門分野の近い教官達の図書の重複購入を避けることができ、予算の有効利用にもつながる。図書を拠出した教官側にしても、学部内にその図書がとどまっているのであれば、再利用も容易である。さらに、学生（そして学外者）にとっても、個々の教官研究室や講座ごとの書庫に収められているよりは、一個所に集中管理されている方が数段利用しやすくなる。

山口大学附属図書館の沿革を見ると、昭和45年に、「文理学部、教育学部、経済学部、農学部及び教養部の各学部分館を廃止して本館に統合」とある。よって、学部図書館を唱えることは整備・改善の歩みに逆行する提案にも思えよう。が、私は、本館の存在や機能を否定している訳



はない。あくまで、各研究室に分散している資料のよりよい利用法はないのかと考えるだけである。

電子的なつながりだけでよいのか

この7月から運用が開始された「やまぐち情報スーパーネットワーク」によって、山口大学の図書館は県内の他大学や公立の図書館と様々な情報のやり取りができるようになった。「情報通信」と言うのとかく海外とのやり取りがもてはやされがちな中で、地元・地域にもしっかりした情報ネットワークを作ろうというのはすばらしい構想であるし、大賛成である。しかし、このネットワークがいくら光ファイバー網を活用した高速・大容量の伝送が可能なものと言っても、例えば、ヴァーチャル・ツアーとでも呼ぼうか、相手の図書館の中を歩いて、そこにある本を手にとって開いて見るような擬似体験をコンピュータ上でできるまでにはなかなかないだろう。結局のところ、図書に関しては、著者名やタイトルなどから蔵書状況を検索することなどが主になるであろう。しかし、本というものはタイトルだけではその中身が分かりにくいものである。自分に関係ありそうだと買って買ったり借りたりしても、中身はまったく想像と違っていたというような経験はどなたにもあるであろう。やはり本は実物を手に取って中身を見してみるに越したことはない。

他の図書館との棲み分けと連携に向けて

そこで提案だが、ただ情報をやり取りするだけの関係ではなく、県内の他の図書館と、人が気軽に行き来できるような関係やシステムを作り上げて頂きたい。より具体的に言えば、例えば、山口大学と県立図書館などの間に小型の循環バスを走らせて、山大生は県立図書館などを、県立図書館などを利用している市民・県民は山口大学の図書館をもっと自由にそして頻繁に使えるようにしてはいかがだろうか。さらには、一般市民への貸出条件を山大生と同様にするくらいの太っ腹なところがあってもよいと思う。

循環バスなどと言うと、「冷房費もままならないのに、何を馬鹿なことを」と思われるかもし

れない。私も、附属図書館の予算の中からバスの運行代を全て捻出して下さいなどと言う気はさらさらない。そうではなくて、バスの費用は、むしろ市や県にお願いすべきことと考えている。山口市には、まだ市立図書館がないし、専門書を多く取り揃えた大きな書店もない。民度が低いからという訳ではなくて、14万人の人口では致し方ない面もあろう（特に専門書の類はどうしてもカタログ注文などになるが、現物が届くとその中身が期待はずれということも間々あって、普段は山口の生活が気に入っていても、そんな時だけは東京が羨ましくなる）。しかし、だからこそ、専門書を多く抱える山口大学の図書館への市民の期待も大きいだろうし、こちらの責任も大である。地域の知性のレベルアップのためにも、本館及び分館の資料は大変貴重なものとなるであろう。しからば、市民・県民のためになる交流経費の分担を市や県にお願いすることは当然できよう。そして、市民に附属図書館を（資料だけでなく、もちろん、勉強するための空間・什器も）開放することで山口大学の存在意義も高まる。

また、県立図書館等との交流を深めることは、山口大学の図書予算の節約・有効利用にもつながる。私は、本館資料選定委員会委員として学習用図書の選定に関わって今年で3年目になるが、選定される学習用図書は、新刊の一般書・教養書が主になりがちであることを常々疑問に感じてきた。一方には、専門書だけでなく、肩の凝らない本も揃えてよいではないかという意見もあろう。また、山口大学の学生用図書費が他大学に比べると少な過ぎるから、もっと学生（学習）用図書費を増やさなくてはならないという議論もある。しかし、なにも学生用だからといってそれほど専門的でない本を増やすのは得策とは思わない。さほど高くはない一般書類であれば、私費での購入もそれほど無理ではないだろうから、学生が私費ではなかなか買えないような高価な専門書を校費購入して提供することこそが学生のためになると考える。新刊小説・実用書等の購入は県立図書館や市立図書館にお任せして、大学図書館は、やはり専門書の集書に専念して欲しい。大学図書館は地域の公共図

書館と提携し、関係を密にして、お互いが補い合い、(購入予定を知らせ合うなどして)重複をなるべく避けた集書を心掛けることが、予算(つまり税金)の有効利用ではないだろうか。大学図書館には、公共図書館とは違う専門書の宝庫としての役割の自覚と努力をお願いしたい。

要するに、学生が専門以外の実用書などを読みたいときは、すぐに県立図書館などに行って読むことができ、逆に、市民が専門的なことを調べたいときには、気軽に山口大学の図書館にやって来ることができるような体制を作り上げたいし、そのための一つの手段として、小型循環バスの運行などはいかがであろうか、という提案である(一般市民にとっては、個人的に訪ねるよりは公の循環バスなどを利用する方が、大学内に気兼ねなく入れるはずである)。ひいては、これが地域に根ざした、市民・県民に親しまれる大学作りにもつながるのである。それぞれの学部が、公開講座・講演等を通して地域に開かれ、そして、地域から認められる大学・学部作りを模索しているが、附属図書館も地域への貢献は大いにできると私は思う。

人の行き来のために循環バスを導入することは、無駄も多く、実現が難しいとすれば、せめて県内の公共図書館と山口大学との間の本の行き来(県立図書館の行っている巡回協力車によるサービスへの参加・協力)くらいはご検討頂きたい。

#### 図書館に対する意識改革を

前稿から、附属図書館への不満や希望を色々述べてきた。が、大学の附属図書館が満足のいくものでないのは、附属図書館だけに問題があるのではなく、実は日本という国と我々日本人の意識に問題があるからだと感じている。私事で恐縮だが、欧米と日本の図書館の捉え方の違いについて考えさせられた経験談をさせて頂くことにする。

私は、カリフォルニアの田舎町で、二人の我が子を現地の幼稚園兼小学校に通わせた経験がある。この学校は、生徒の大半が中流以下の家庭の子供達で、寄付金も少ないので、はっきり言って、小さな貧乏学校だった。一部の教室は

掘建小屋と言ってもよいような状態だった。しかし、この貧乏学校でも、図書館はびっくりするほど充実していた。図書も多く、コンピュータなどもしっかり揃っていた。さらに、有能な司書が二人いて、日々の授業の内容を把握して、利用しそうな資料を前もってピックアップしておくなどしていた。つまり、幼稚園や小学校においても、図書館が学校教育で中心的な役割を果たしていることがとても印象的だった。このようにして過ごした子供が大学生になれば、大学内でも図書館を最も大切な場所として自然に捉えるであろう。

それに引き替え、日本ではどうであろうか。幼稚園から高校まで、図書館の資料を利用しながら学習するという機会や意識をほとんど持たずに過ごす生徒も多いだろう。日本では教科書が個人に与えられるが、アメリカでは、個人には与えられず、共有財産として教室や図書館に置かれるという制度上の違いも関係してくるだろう。しかし、その点を差し引いても、日本の学校においては、あまりに図書館の占める地位が低すぎる。例えば、我が子が通った山口市内の某小学校は、校舎は大変立派だが、図書室は笑ってしまうほどであった。並んでいる本は少ないし、そのうちの多くは開校時に地域から寄付されたものであった(寄付というと聞こえがいいが、要するに不要品のリサイクルである)。小学生向けの古典や基本図書はパラッとしかなく、おまけに、配列の基準もない。検索のカードもなければ、もちろん、司書もいない。一応図書の係になっている先生もどんな本がどのように並んでいるのか知らない、というお粗末な具合であった。まあ、これは極端な例ではあっても、似たような状況が見られる学校も少なくはないだろう。このような状態で学校生活を送れば、大学生になっても、図書館を重要な場所として捉えるはずがないのである。学生だけでなく、教員の意識においても、附属図書館がそれほど重要とされていない気がする。かく言う私も、白状すると、運営委員になるまでは附属図書館に対する期待はそれほどなかった。教官の中にも、以前の私のように、自分の研究室や講座の資料の充実には一生懸命になっても、附



属図書館のことは気にしていない(そもそも館内に入ったこともあまりない)という方も結構いるのではないだろうか。つまり、日本人にとっては、図書館への期待や関心が、欧米で見られるそれに比べて、実に少ない。私自身、「良書や必読本は、図書館で借りるのではなく、なるべく自分で買いたい」という気持ちが強く、欧米人のように図書館を有効的に利用できていないことに気付く。

結局、予算よりもスペースよりも、日本の図書館に一番欠けているのは、図書館利用者の「図書館が、調べ、発見し、解決し、育み、発信する場だ」というような意識なのかもしれない。学生そして教官の意識が、オリエンテーションや各種講習会を充実することなどにもよって、改まることを望む。

#### 補足とまとめ

「IT革命」が流行語になる昨今、我が附属図書館の電子化も進み、とても便利になった。「図書館ホームページ」や「図書館活動情報データベース」は惚れ惚れするほどよくできていると思う。また、昨年から本館内に開設された「情報ラウンジ」はインターネット等を利用する学生達で賑わい、図書館内が活気づいて見える。

しかし、「コンピュータでの検索は図書館以外の場所からでもできるのに、図書館内にコンピュータ器機専用のスペースが増えたことで、元々あった、本を広げて学習する普通の場所が減ってしまった。キーボードを叩く音も響いて気になることがある」といった意見を耳にすることもある。よって、高度情報化・電子化ということにばかりに目が行ったり予算がすぎ込まれ、本来あるべきものや基本的な部分がないがしろにされたり削られてしまうことがないように願いたい。館内の資料の充実や配列の工夫、冷暖房の完備、静かな環境作り、十分なスペースと机・テーブルや照明の整備などは、絶対おろそかにはして欲しくない。また、限られた予算を有効利用するためにも、図書資料の集中管理を進めたり、他の図書館との連携を強めることも必要と考える。さらに、大学図書館を一般市民にも開放することや、利用者に図書館の重要性

を認識してもらえるように様々な工夫・努力・活動をすることが大切であろう。

さらに付け加えるならば、現在の8時半から20時までという開館時間を少しでも長くするように努力して頂きたい。もちろんそうすれば人件費が増え、図書館の予算を圧迫することは百も承知している。が、例えば、試験期間中だけでも開館時間を朝の7時から夜の12時ごろまでに延長するなどし、学生達の勉学の利便をはかって欲しい。

最後に、もう一つだけ附属図書館へ小さな要望を書き加えたい。本は中身が肝心である。が、そのカバーや帯そして箱も、本という作品の一部であり、また、そのエッセンスが分かりやすく記されていることも多く、それなりの価値がある。そこで、もし可能であれば、カバーや帯は、捨てることなく、(県立図書館がそうしているように)本体に糊付けして残して頂きたい。その方が本の傷みや汚れも少なくなる。

#### むすび

以上、あれこれと文句を書き連ねてきたが、私も附属図書館運営委員になったおかげで、館長をはじめとする図書館職員の方々の人知れぬご苦労が分かるようになったつもりでいるし、感謝もしている。私の文句は図書館へのエールとご理解頂きたい。繰り返しになるが、大学の附属図書館は大学の質のバロメーターであるので、山口大学の附属図書館が、学内で最も重要な存在の一つとして認められることを願ってやまない。

21世紀の今後は、電子図書が盛んになって、「手のひらにのる図書館」というような時代がやって来るかもしれない。そうすれば日本人はますます書店や図書館に行かなくなるかもしれない。が、せめて大学の図書館だけは、学内で最も魅力的で、最も知的欲求を満たしてくれる場所であって欲しいし、その重要性や価値がますます高まることを願うばかりである。

(おた さとし)



# 平成13年度利用ガイダンス（4月～8月）

今年度は、利用ガイダンスの中身を一新し、図書館による「情報リテラシー教育支援」元年と位置付けして、参考資料の作成や実りある内容の充実に力点を置いて実施してきました。また、各学部の担当教官の力強いご協力も頂き、前半だけで昨年度の4倍の2400名以上の実績をあげることができました。10月からは後期の各種講習会を用意しておりますので、ご期待下さい。

## 【本館】

**新入生オリエンテーション** 0.5時間  
 対象：新入生 2010名  
 日程：4月9日  
 内容：大学図書館についての説明

**24時間利用ガイダンス** 0.5時間  
 対象：個人（教官・院生） 48名  
 日程：毎週火曜日 15:00から  
 内容：館内の説明及び入退館実習

**図書館活用講習会** 各1～2時間  
 対象：個人（学生希望者を対象に） 475名  
 日程：4月11日から7月11日  
 内容：それぞれのコースに沿った講習

### 図書館利用基礎コース

- ・ライブラリーツアー
- ・図書館基礎活用講座
- ・山口大学蔵書検索
- ・情報コンセント利用講習会

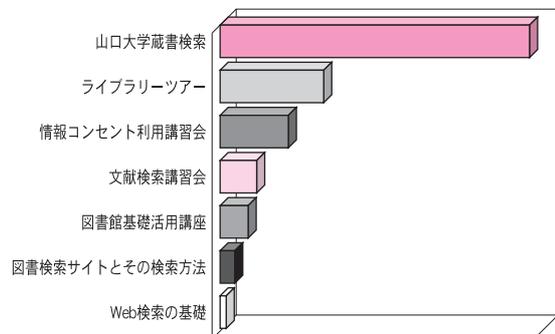
### インターネット検索活用コース

- ・図書検索サイトとその検索方法
- ・Web検索の基礎

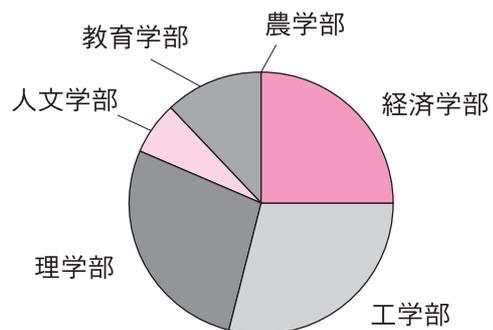
**図書館ガイダンス** 1時間  
 対象：講座 15講座 1025名  
 日程：4月11日から6月8日  
 内容：図書館施設紹介・利用方法  
 およびOPAC・情報ラウンジ利用説明



## 講習会参加者割合



## ガイダンス学部内訳



## 【医学部分館】

24時間利用ガイダンス 0.5時間  
 対象：個人 262名  
 日程：毎週1回  
 内容：powerpointの入退館解説及び実習



### 図書館オリエンテーション

対象：新人（学生、看護婦等） 468名  
 内容：図書館の利用方法および図書館データベースの使用方法

- ・看護婦オリエンテーション 2.5時間 4月 3日、4日
- ・学士編入生オリエンテーション 0.25時間 4月 9日
- ・大学院医学研究科新入生オリエンテーション 0.25時間 4月 9日
- ・保健学科新入生オリエンテーション 0.25時間 4月10日
- ・大学院応用医工学科新入生オリエンテーション 0.25時間 5月 7日
- ・医療技術短期大学 情報科学講座 1.5時間 4月19日
- ・大学院共通基礎コースの講義 0.7時間 5月24日

### 医学部保健学科説明会

対象：高校生  
 日程：8月2日  
 内容：図書館の概要説明



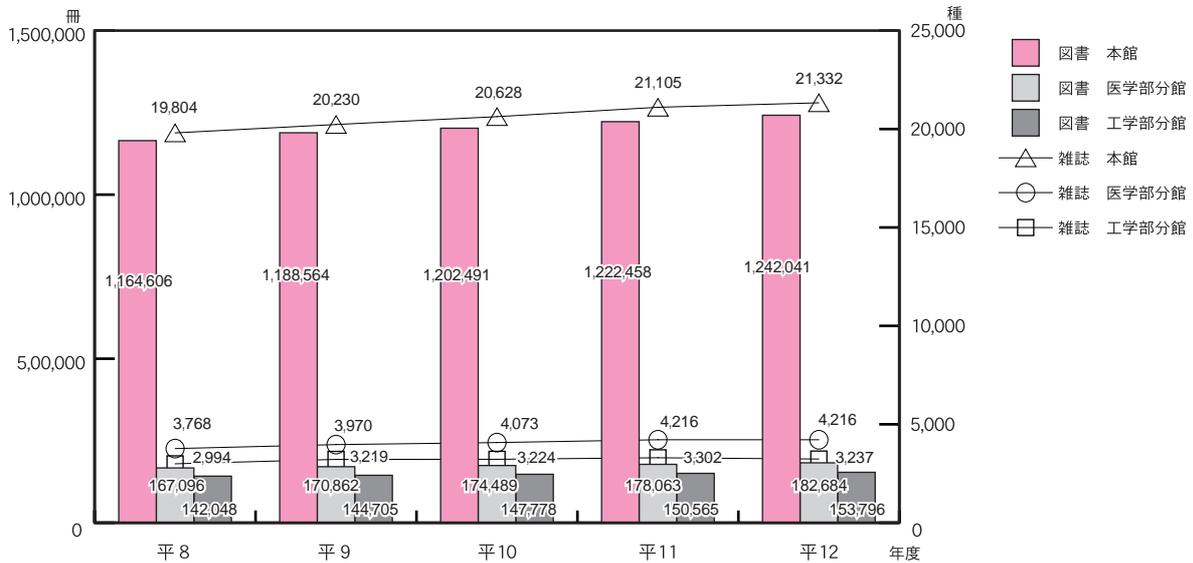
## 【工学部分館】

24時間利用ガイダンス 0.5時間  
 対象：個人（教官・院生） 33名  
 日程：随時  
 内容：館内の説明及び実際の入退館実習

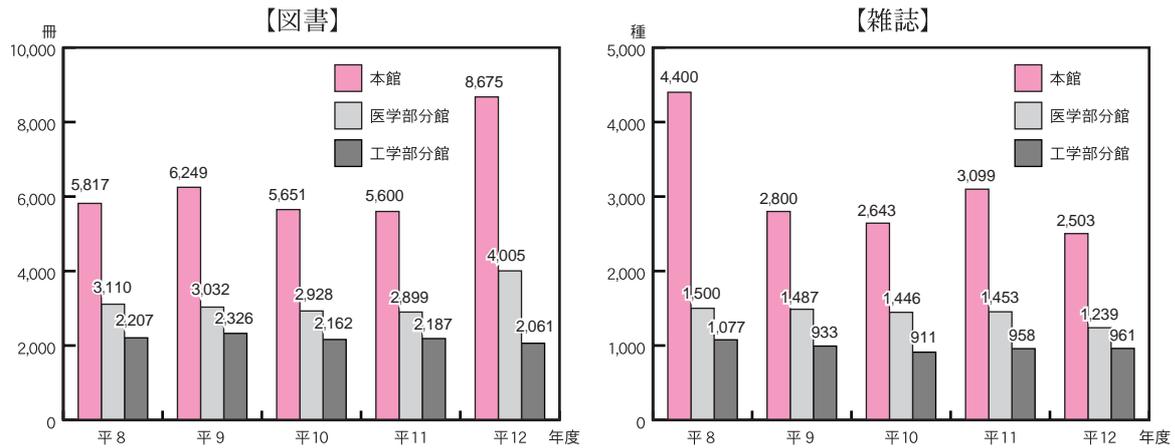
文献検索講習会 2時間  
 対象：個人（教官・院生） 54名  
 日程：5月10日から5月15日  
 内容：Inside-web・CaonCD・Web-CAT等

# 附属図書館業務統計 (平成8年~12年度)

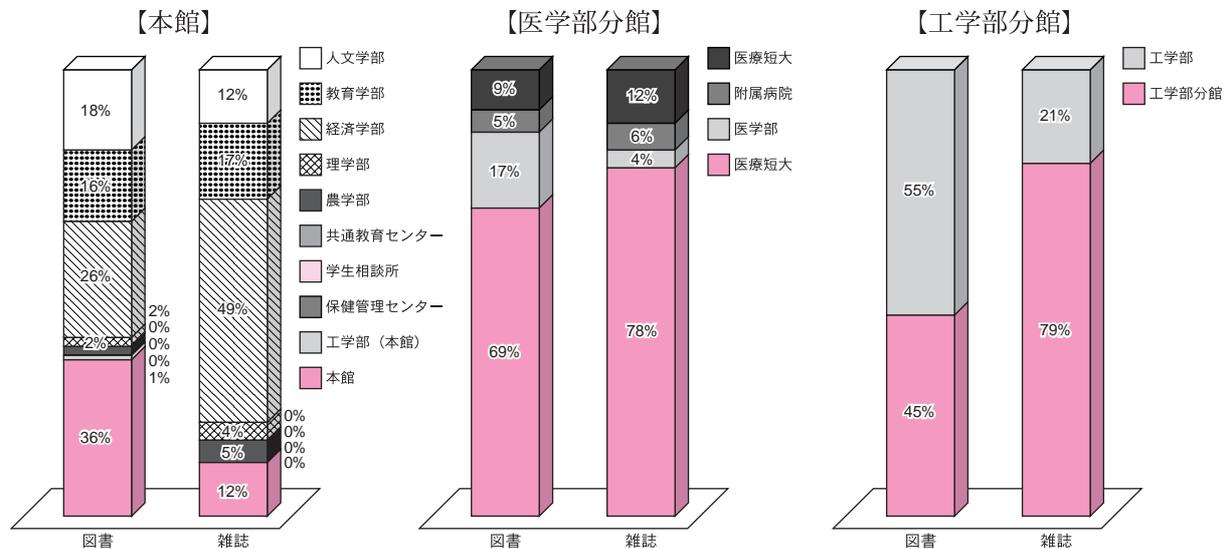
○歳書数



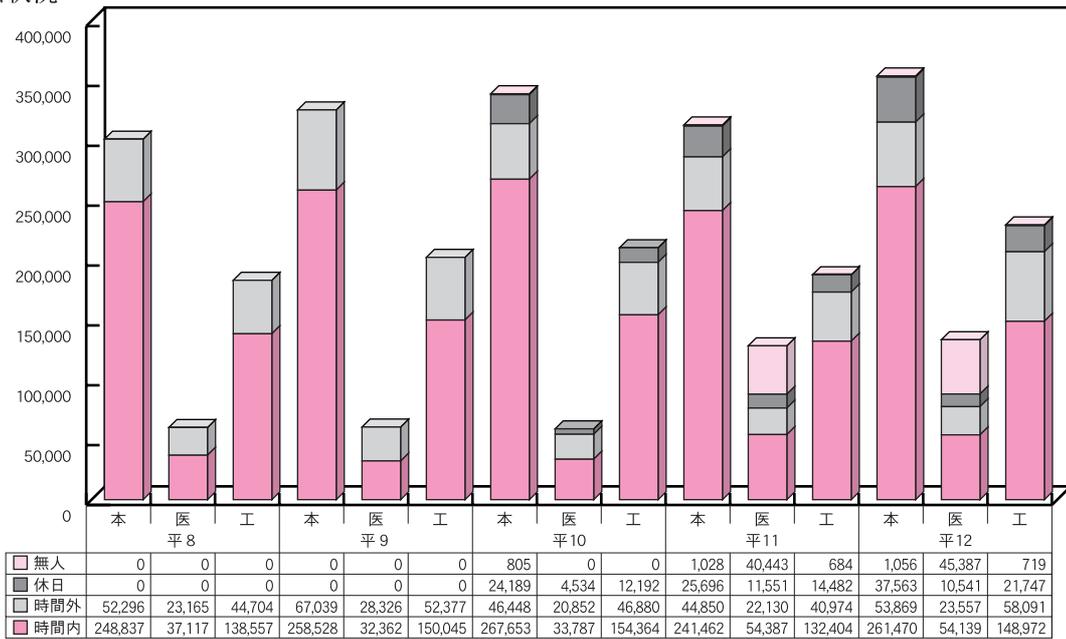
○受入数



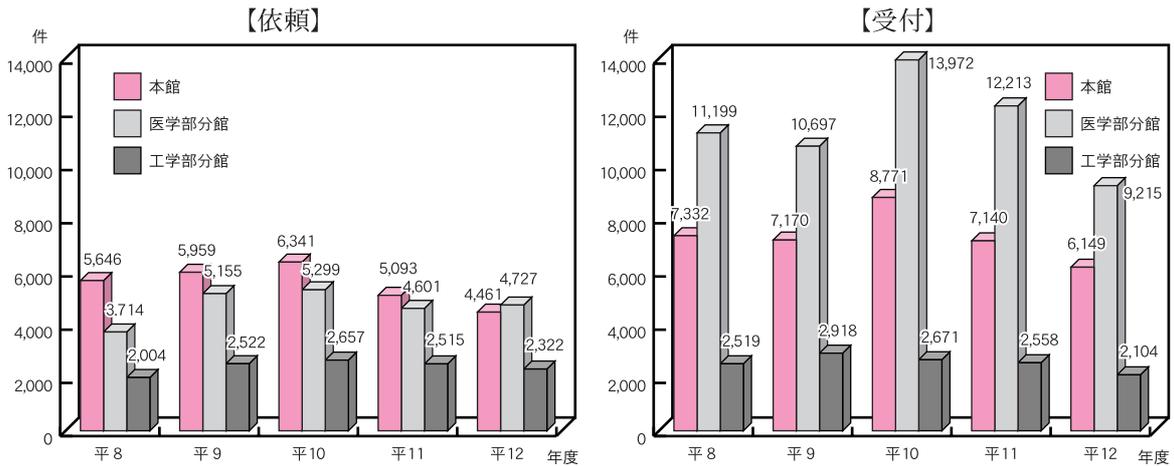
○購入資料の集中度 (平成12年度)



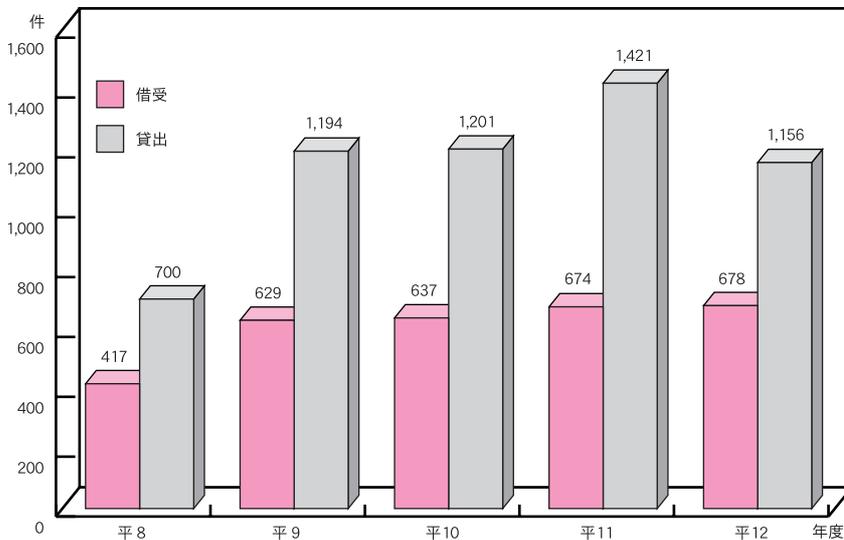
○入館状況



○相互協力サービス（文献複写）



○相互貸借サービス（借受・貸出）



# トピックス

## ALC英語学習自習システムの稼働

総合情報処理センターと共同で、学内者を対象としたマルチメディア型英語学習システム「ALCNetAcademy」を導入しました。学内LANに繋がったPCであれば場所や時間に関係なくTOEIC試験に対応する柔軟な英語力を自習できるようになりました。



## 学内文献複写伝送サービスの実施

平成13年4月より、山口地区と宇部地区（小串・常盤両地区）との間における学術文献複写サービス改善のため、コピー機を使った文献伝送サービス（DDS：Document Delivery System）の試行運用を開始いたしました。

これにより、従来に比べ大幅な時間短縮を実現し、FAXとは比べ物にならない鮮明な画像でやりとりが可能となっています。



## 図書館活用ビデオの配信開始



情報リテラシー教育支援として、小冊子（参考資料）の作成に加えて、総合情報処理センターが運用を開始したVOD（Video On Demand）サーバを利用して、図書館の達人シリーズ等の配信を開始しました。

これまでは、放送大学やBBCニュース等のリアル番組の配信を放送サービスとして運用してきましたが、これからは学内外の様々な情報を提供することが可能になりました。

## 医学部分館で一般への貸出開始

平成13年4月より、本館・工学部分館に続いて、医学部分館においても一般市民への貸出サービスを開始しました。

貸出冊数は2冊、貸出期限は1週間です。



## 情報リテラシー教育支援盛況

共通教育センター情報処理教育部と協力して情報リテラシー教育のための小冊子を作成し、授業教材として500部以上利用されています。

また今年のシラバスには「図書館の文献検索システムを学ぶ」等のテーマも見ることができ、授業の中で図書館利用を取り上げていただくことも増えてきました。

この成果を踏まえ、着実に前進させるために、今回実施した支援の評価や実施体制整備・授業との連携強化を図る必要があると考えております。

(右：講習会電子チラシと参考資料)



## 平成13年度 附属図書館各種委員会名簿

は委員長

運営委員会	石井 道悦 (情報サービス課長)
中村 和行 (館長)	上田 照賀 (図書館専門員)
芳原 達也 (医学部分館長)	
溝田 忠人 (工学部分館長)	企画検討委員会
近藤 喬一 (人文学部)	中村 和行 (館長)
太田 聡 (人文学部)	芳原 達也 (医学部分館長)
吉村 誠 (教育学部)	溝田 忠人 (工学部分館長)
福田 修 (教育学部)	近藤 喬一 (人文学部)
塚田 広人 (経済学部)	富岡 憲治 (理学部)
小林 一于 (経済学部)	竹若 重勝 (事務部長)
富岡 憲治 (理学部)	中野美智子 (情報管理課長)
三浦 保範 (理学部)	石井 道悦 (情報サービス課長)
原田 規章 (医学部)	
東 玲子 (医学部)	広報委員会
浜本 義彦 (工学部)	中村 和行 (館長)
福永 公寿 (工学部)	芳原 達也 (医学部分館長)
糸原 義人 (農学部)	溝田 忠人 (工学部分館長)
井上 誠 (農学部)	吉村 誠 (教育学部)
渡辺 義文 (附属病院)	富岡 憲治 (理学部)
竹若 重勝 (事務部長)	竹若 重勝 (事務部長)
	中野美智子 (情報管理課長)
将来計画検討委員会	石井 道悦 (情報サービス課長)
運営委員会委員上記19名のとおり	
	自己点検・評価小委員会
自己点検・評価委員会	近藤 喬一 (人文学部)
運営委員会委員上記19名及び	吉村 誠 (教育学部)
中野美智子 (情報管理課長)	塚田 広人 (経済学部)



三浦 保範 (理 学 部)	東 玲子 (保 健 学 科)
東 玲子 (医 学 部)	岡野こずえ (保 健 学 科)
浜本 義彦 (工 学 部)	
糸原 義人 (農 学 部)	工学部図書・研究報告委員会
竹若 重勝 (事 務 部 長)	溝田 忠人 (分 館 長)
中野美智子 (情 報 管 理 課 長)	浜本 義彦 (運 営 委 員)
石井 道悦 (情 報 サ ー ビ ス 課 長)	福永 公寿 (運 営 委 員)
上田 照賀 (図 書 館 専 門 員)	中野 公彦 (機 械)
	福永 公寿 (応 用 化 学)
本館図書委員会	樋口 隆哉 (社 会 建 設)
中村 和行 (館 長)	三好 正毅 (電 気 電 子)
近藤 喬一 (人 文 学 部)	内村 俊二 (知 能 情 報)
太田 聡 (人 文 学 部)	藤森 宏高 (機 能 材 料)
吉村 誠 (教 育 学 部)	M.L.Higgins (感 性 デ ザ イ ン)
福田 修 (教 育 学 部)	柳原 宏 (共 通 講 座)
塚田 広人 (経 済 学 部)	
小林 一于 (経 済 学 部)	本館資料選定委員会
富岡 憲治 (理 学 部)	太田 聡 (人 文 学 部)
三浦 保範 (理 学 部)	福田 修 (教 育 学 部)
糸原 義人 (農 学 部)	小林 一于 (経 済 学 部)
井上 誠 (農 学 部)	富岡 憲治 (理 学 部)
竹若 重勝 (事 務 部 長)	糸原 義人 (農 学 部)
	上田 照賀 (図 書 館 専 門 員)
医学部分館図書委員会	高崎 鈴枝 (資 料 受 入 係)
芳原 達也 (分 館 長)	江見 伸子 (目 録 情 報 係)
佐々木功典 (病 理 学 第 二)	田中 純子 (資 料 サ ー ビ ス 係)
渡辺 義文 (神 經 精 神 医 学)	岡田 隆 (情 報 サ ー ビ ス 係)
木村 佳弘 (薬 理 学)	赤野 徹 (電 子 情 報 係)
谷澤 幸生 (第 三 内 科)	

### 本学関係教官著作寄贈図書

寄 贈 者	著 者 名	書 名
・平野 芳信 (人文学部)	平野芳信著	村上春樹と 最初の夫の死ぬ物語
・澤 喜司郎 (経済学部)	澤喜司郎著	国際海運経済学
・澤 喜司郎 (経済学部)	小林照夫[ほか]編著	現代日本経済と港湾
・辻 正二 (人文学部)	辻正二著	アンビバランスの社会学
・根ヶ山 徹 (人文学部)	根ヶ山徹著	明清戯曲演劇史論序説
・Franz (人文学部)	Franz Hintereder-Emde著	Ich-Problematik um 1900 in der japanischen und deutschsprachigen Moderne
・中尾 訓生 (経済学部)	中尾訓生著	日本戦時思想の研究
・米谷 雅之 (経済学部)	米谷雅之著	現代製品戦略論
・岡 芳知 (医学部)	岡芳知編	糖尿病学2001
・上村 明男 (工学部)	上村明男著	化学は楽しいワンダーランド
・大坂 英雄 (工学部)	中村育雄, 大坂英雄著	工科系流体力学
・大坂 英雄 (工学部)	中村育雄, 大坂英雄著	機械流体工学：工学基礎
・大坂 英雄 (工学部)	須藤浩三[ほか]共著	流体機械(現代機械工学シリーズ)
・谷光 太郎 (経済学部)	J.D.ニコラス[ほか]著 谷光太郎訳	統合軍参謀マニュアル



## 会議

### 学 外

13. 2.20 NACSIS CAT/ILL講習会担当者会議  
(於：国立情報学研究所)
13. 3. 2 第3回山口県図書館協会理事会  
(於：山口県立図書館)
13. 3. 8 山口県図書館協会参考業務研究部会  
(於：山口県立図書館)
13. 3.15 研究成果普及のためのオンライン出版に関するワークショップ  
(於：国立情報学研究所)
13. 4.26 第49回中国四国地区大学図書館協議会総会  
(於：メルパルク広島)  
・文献画像伝送システムによる文献複写サービスについて
13. 4.27 第28回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会  
(於：メルパルク広島)  
・独立行政法人化に向けての大学図書館の在り方について  
・情報公開法への対応について  
・電子ジャーナルコンソーシアムについて
13. 5.17-18 第72回日本医学図書館協会総会  
(於：栃木県総合文化センター)
13. 5.18 平成13年度山口県図書館協会役員会  
(於：山口県立図書館)
13. 5.29 平成13年度国立大学附属図書館事務部課長会議  
(於：東京医科歯科大学)
13. 6.27-28 第48回国立大学図書館協会総会  
(於：北海道大学)  
・DDSの運用について  
・大学の管理運営体制における附属図書館長の位置付けと役割について  
・電子ジャーナルについて  
・総合情報処理センター等の学内情報関連施設との統合等も視野に入れた連携強化策について  
・教育研究基盤校費及び間接経費と図書館予算のあり方について
13. 6.28 同上研究集会(赤野電子情報係員発表)  
題目：図書館統計データの公開と共有について
13. 6.29 平成13年度山口県図書館協会定期総会  
(於：山口県立図書館)
13. 7.18 山口県大学図書館協議会総会  
(於：下関市立大学)  
・山口県域総合目録システムについて  
・東亜大学附属図書館の加盟について  
・図書館間での資料の棲み分けについて  
・大学図書館の改革について  
・実務担当者の研修会について  
・本協議会のホームページ作成について

### 学 内

13. 2. 6 第3回自己点検・評価小委員会
13. 2.22 企画懇談会
13. 2.23 将来計画事務検討会
13. 3.14 第11回本館資料選定委員会
13. 3.19 第4回自己点検・評価小委員会
13. 3.19 企画懇談会
13. 3.26 第100回運営委員会  
・附属図書館における情報公開施行への対応方針について  
・山口大学附属図書館利用細則の制定について  
・附属図書館の理念・目標等について  
・平成13年度附属図書館資料費の基盤経費化要求について  
・平成13年度附属図書館管理運営費の基盤経費化要求について
13. 3.26 第2回自己点検・評価委員会
13. 3.26 第3回医学部分館図書委員会(持廻り)
13. 4.19 第101回運営委員会  
・各種委員会委員の選出について  
・平成13年度附属図書館管理運営費の全学共通経費化について  
・平成13年度学生用図書資料・電子化資料の全学共通経費化について
13. 4.19 第59回本館図書委員会
13. 4.23 第1回本館資料選定委員会
13. 5. 9 平成13年度第1回工学部分館図書・研究報告委員会
13. 5.21 第5回自己点検・評価小委員会
13. 5.21 第2回本館資料選定委員会
13. 6.20 第3回本館資料選定委員会
13. 6.21 第3回自己点検・評価委員会
13. 6.21 第102回運営委員会  
・平成13年度附属図書館所要経費の全学共通経費要求結果について  
・平成13年度戦略的教育研究重点化経費要求について  
・研究用電子化資料費要求について  
・平成13年度学長裁量経費要求について
13. 7.23 第6回自己点検・評価小委員会
13. 7.30 第103回運営委員会  
・平成12年度附属図書館校費収支決算書について  
・平成13年度戦略的教育研究重点化経費要求結果について  
・学生用図書資料費の学部等支援措置について  
・平成13年度学生用図書資料整備費の配分基準案及び配分案について  
・附属図書館資料選定に関する申し合わせについて  
・平成13年度学長裁量経費要求について  
・競争的資金の間接経費実施計画について
13. 7.30 第4回将来計画検討委員会
13. 7.30 第60回本館図書委員会



## 研修

- |   |   |
|---|---|
| <p>13. 3. 7 山口県大学図書館協議会実務者研修会（於：山口大学附属図書館）<br/>講師：小嶋直哉図書館長<br/>参加者：県内大学図書館職員ほか</p> <p>13. 4.20 平成13年度山口大学接遇研修（於：山口大学）<br/>参加者：金重主任,高田主任,原田係員,杉原係員,鳥谷係員</p> <p>13. 6.27-29 平成13年度山口大学中堅係員研修（於：山口大学）<br/>参加者：守永情報サービス係員</p> | <p>13. 7.17-19 パソコンリーダー研修会（於：山口大学）<br/>参加者：高崎資料受入係員</p> <p>13. 7.17-19 SCSによる大学図書館職員長期研修講義（於：山口大学）<br/>参加者：県内大学図書館職員ほか</p> <p>13. 7. 9-27 平成13年度大学図書館職員長期研修（於：図書館情報大学ほか）<br/>参加者：赤野電子情報係員</p> |
|---|---|

## 人事異動

- |  |  |
|--|--|
| <p>13. 1.31 任 期 満 了 松西加奈世 医学部分館情報サービス係</p> <p>13. 3.30 任 期 満 了 退 職 宇都宮麻衣 情報サービス課資料サービス係<br/>" 首藤真由美 情報サービス課情報サービス係</p> <p>13. 3.31 任 期 満 了 小嶋 直哉 附属図書館長<br/>定 年 退 職 藤井 良雄 情報管理課総務係長<br/>任 期 満 了 退 職 宮地恵津子 情報管理課資料受入係</p> <p>13. 4. 1 併 任 中村 和行 附属図書館長（医学部分館長）<br/>" 芳原 達也 附属図書館医学部分館長<br/>採 用 原田 佳子 情報管理課資料受入係<br/>" 陶山 敬子 情報サービス課資料サービス係<br/>" 後藤 友紀 情報サービス課情報サービス係<br/>昇 任 高田美栄子 情報管理課総務主任（情報管理課総務係員）<br/>配 置 換 石井 道悦 情報サービス課長（高知医科大学教務部図書館課長）<br/>" 小早川良規 九州大学附属図書館情報システム課長（情報サービス課長）</p> | <p>" 平川 和孝 情報管理課総務係長（農学部会計係長）</p> <p>" 赤間 篤彦 医学部分館情報管理係長（医学部分館情報管理係長）</p> <p>" 吉光 紀行 工学部分館情報管理係長（医学部分館情報管理係長）</p> <p>" 赤野 徹 情報サービス課電子情報係（工学部分館情報サービス係）</p> <p>" 鳥谷 和世 工学部分館情報サービス係（情報サービス課電子情報係）</p> <p>13. 5.31 任 期 満 了 田中 正吾 附属図書館工学部分館長</p> <p>13. 6. 1 併 任 溝田 忠人 附属図書館工学部分館長</p> <p>13. 6.30 退 職 佐古 艶子 情報管理課資料受入係</p> <p>13. 7. 1 配 置 換 蔵成 愛子 情報管理課資料受入係（情報サービス課資料サービス係）</p> <p>13. 7.16 採 用 畑 祐子 情報サービス課資料サービス係</p> |
|--|--|

## 編集後記

第22巻1号をお届けする。本号には中村和行新図書館長から「図書館と徒然なるままに」、図書館運営委員会委員太田聡先生（人文学部）から「魅力ある図書館（その3）」をご寄稿いただいた。中村館長の就任の弁、図書館を「知的で快適な広場」とするため、「図書館の利用にお気づきの点があれば、辛口でご指摘頂きたい」のすぐあとに、太田先生の図書館へのまさに辛口のご指摘が並んでいる。編集子

の意図せざる悪戯である？

業務報告では、利用ガイダンスにご注目いただきたい。昨年度の5倍、2,400名以上の学生が各種の図書館利用ガイダンスに参加している。図書館の機能は、単に閲覧・貸出のみではなく、情報リテラシーを身につけ、発揮する貴重な場として、そこから図書館は発展する。（石）